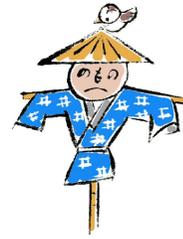


# 円通寺だより

平成 30 年 10 月  
第 107 号



## 仏法を聴くということ

猛暑、大雨、台風、地震と、自然界の災害をすべて網羅したかのような夏が過ぎ、一気に秋が来た感じがします。最近の自然災害は桁外れの規模で、これでもかこれでもかと人間に挑戦しているのではないかとさえ思っています。大切な人を亡くした人、生活の場を奪われた人、田畑や職場が被害を受け生活の糧を失った人、立ち直る暇もなく追い打ちをかける台風の襲来。生きる意欲も意味も見失いがちになる現実の世界ですが、安多理深という仏教学者が残した言葉に『どんな現実の難関にあっても耐えていける人間を生み出す。それが仏法である。』（9月25日北陸中日新聞、今週のことばより）というのがあります。仏法とは、苦難に遭ったときこそ現実を受け止め耐えていける人間になる教えということかと思えます。とは言え、私たちには煩惱というものがあってそう簡単にはいきません。誰かを怨み、世を怨み、なんで自分がこんな目に遭わなければならないのかと、なかなか現実を受け入れることは出来ません。そんな自分であってもこれが自分の真実の姿と受け止めた上で現実と向き合っていくことが、仏法を聴くということなのかなと思っています。仏法は一度聞いてわかったというのではなく、何度も繰り返し聞いて、聞いて、聞いていくことが大事なのだと教わったことがあります。なぜなら人の心は変わりやすく、忘れやすく、何度も同じ過ちを繰り返す生き物だから。何のために人は生きるのか考えさせられたことでした。

合掌



## 報恩講のご案内

11月4日、5日に当寺にて報恩講のお勤めがあります。御多用中とは思いますが皆さまお誘い合わせの上お参り下さい。

### 日程

11月4日（日）

晨朝 午前8時半

日中 午後1時半

叅夜 午後3時

初夜 ※叅夜に引き続き行います。

11月5日（月）

晨朝 午前8時半

日中 午後2時

## 法 語

「きくというは しんじん 信心をあらわす み 御のりなり」

真宗聖典にはこの言葉の前に、『きくというは、本願をききてうたがうところなきを「聞」というなり。』とあります。

「聞」ということは自分の都合に合うことだけを聞いて自我を満足させることではなく、教えを聞くことによって、自分の真実の姿が明らかになり、身の事実に目覚めることを言うのでしょうか。「聞」により自我が根底から問われ、自我に執着しているこの身が明らかになることを「信心」と教示されているのでしょうか。（この解説は、東本願寺出版から出ている「今日の言葉」を参考にさせて頂きました。）話し上手は聞き上手と言われますが、人の話を聞くとか相手の話をしっかり聞くというのは意外と難しい気がします。相手がまだ話している最中に自分が話したいことが浮かんで来て、相手の話が上の空になることもしばしば。ひどいときは相手の話を遮って割り込みます。まずは相手の話にしっかり耳を傾けるところから気をつけたいものです。

